

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	野球部 : 部報
Author(s)	藤吉, 喜祐
Citation	龍南, 224 : 79 - 81
Issue date	1933-03-02
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7117
Right	

部 報

野 球 部

藤 吉 喜 祐

思ひ起せば遠く明治廿八九年の昔。西海の一角龍南の地に吾が野球部が孤々の聲をあげてより年を閲する既に三拾數星霜其の間血潮にまみれた先人の孜孜たる努力により九州の地龍南に五高野球部ありとの印象を世人の腦裡に深く刻みつけた、而して薩湘の彼方に好敵七高現れるに及び對校野球戰の炬火は果然全土に風雲を捲き起し西南の役より此方寂として聲なき肥薩の天地に再び戰雲低迷するの止むなきに到り剛毅朴訥を基調とせる五高魂は氣骨稜々たる全國の士をして欣喜扼腕せしむるに至りぬ。されど潮流の汎濫する所空拳の如何とも成し難く此の壯舉も遂に世流の猛威に永遠の過去として葬滅せり。嗚呼意氣に燃えたる健兒の胸中ぞ慕して余りあるべし。斯くて幾度か血の雨を降ら

せし快戰涙と共に後を絶ちしも男子過去を喋々するを欲ぜず其の銳矛を中原の鹿に向け或は覇を天下に稱へ或は一接球により全球界に渦紋を惹起する等の痛快兒を球史中に刷り込めり。

然るに何ぞや、汝野球部。とりて秋風の梧葉に例へんか轉た薪上に臥して月の盈げ滿ち春秋徒らに去來するを教へる既に五度、遂に五高起たざるかの聲を聞くや良久矣。嗚呼連綿たる傳統を嗣ぎし吾等寶塔を守りて玉碎せずんば何の面目かあらんと小野、梅宮、石見、岡本の四新人を迎へて著しき熱と意氣とに團結して七年度の桑矢を放つたのだつた。

三高専りーグも對高工二十二對三、對藥專十九對三と輕くあしらひ熊鐵に一度敗を取りし外は熊本諸チームを甜め盡し吾等は一意大會へと邁進す流汗淋漓、野人の健脚鐵骨綿の如く疲れて始めて快哉を叫ぶ、ひた押しに走る熱と力人馬諸共に喰はん形相物凄く福岡の空を睨みて愈々野人の本領を發揮す。合宿の米櫃此の頃より其の變化猛烈を極め出す、六月十一日最初の福岡遠征をなし對福岡7A—4對

九大3-4にて一勝一敗、未だ吾等の未熟なるを見せつけられた。

雨が止んで蟬が鳴き出した夏が来たのだ。最後の試練の日が目前にブラ下つてゐる。過去の努力の總決算の日が相恰をくづして招いてゐる。吾等が腕は今こそ錚々たる響を立てゝゐる。来るもの何者ぞ。伏龍一度起たんか塵にして呉れやうぞ。去る福岡遠征によりチームは刷新され内野、外野各々適材適所、何處を突かれてもビクともしない程吾等の技は伸びてゐた。然るべく吾等は頑張つたのだ。溺愛してかゝる武夫原の情熱の酷暑の中に血の滲む猛練習を續けて來た。来る日も来る日も兵友一團となりて互に相勞はり相勵まし球枝三昧一意精進した。薄昏の中に飛び来る眞黒な球を噛みついて捕つた。そして空高く輝く銀漢を仰いで一日の奮闘の勞苦を醫しつゝ合宿に歸つた。此所に吾等の向上あり。聞け憂然たる健棒の響。見よ偉駄天の力走。何者か辟易し、恐れを抱かざらむ。武夫原は囁く。行けよ汝等敵は唯榮城の菊葉のみ。今年こそは我が食膳に中原の鹿を捧げよと。應と答へて吾等は起つた。行くぞ武夫原さ

らば!! 満を持したる強弓は將に桑矢を放たんばかりだ。待て暫し。願ひの土産持ち歸らうぞ。七月十三日元氣で福岡へ乗り込む。主將會議の結果相手は京城醫專試合迄三日あり福岡にて練習。猛烈な元氣當るべからず朝鮮豎子何ぞ吾が腕に双向ひ得るものぞ。十六日愈々明日に迫る。夕飯後一同海岸迄丹田へ力を込めに行く。歸つて一同熟睡。此の分では明日のコンデション上々と喜ぶ。然るに何事ぞ明朝食事時報あり前日の悶着の爲吾試合一日延期と。九大の威信なきに今更愛想がつきる。一同切齒扼腕の限りを盡す余秘かに氣分の怠緩を恐る。十八日快晴。行け何處迄も、力の限りを盡し斃れて後止むは男子の本快だ。橄欖の譜、拍手に迎へられて入場。

五高先攻、一回兩軍三者凡退、二回(五)小野聲援に送られボックスに立つ。長棍一打。見よ球は右翼の頭上を輕く越す長打。三壘打か本壘打かと歡衆騒ぐにあゝ不運。右翼手の送球風に乗つて三壘直前に小野を刺す(京)關四球、内田のバントに二進す。古澤樋口共に四球。一死滿壘の時捕手逸球に一點を先取さる。三回(京)二死後若林四球に出で壘

投に三進すれど關の左邪飛を今川好捕して事なきを得、四回(五)無爲(京)内田遊匍暴球に二進、樋口の右翼安打に本壘に突込めど石見の好投に刺す。五回(五)小野左前安打に出で好機を作る。梅宮のバント及び石見の遊匍に三進、二宮三壘を強襲し小野生還今川投匍。一對一にて戦は俄然白熱化す。好漢幸ひ自重せよ。六回無爲七回(五)二死後石見右翼に安打し野手ハンプルする間に三壘強奪好機を作りしも二宮二匍。八回(五)余すは二回。起て。ムンズと組んだ兩手を押し切るんだ。球神我に幸せずんば龍南人の熱と力で崩すんだ。法螺貝が聞える行手は眞紅だ。もはや神運と人力の戦だ。二死後池田二壘に強襲安打、よしと大津微笑んで現る。されど池田焦りて二、三間に刺さる。(京)打順よし。一番中川三壘左を抜く。兒山中飛、若林三振。萬場聲なく沈黙に送られ今日の當り屋主將關現る。小野の剛球關の健棒物々しき一騎打。ベンチ敬遠を命ずれど小野流石に若し。烈々たる争闘心は小策を弄せず熱を以て吞まんとかゝる、えい!! まゝよ。一か八かだ當つて碎ける、一投一球肺腑を刺す、兩雄全身之れ殺氣。月下の梨花、あつ!!

兇!! 一壘手足下を突く強襲。無念、中川生還。内田右翼に終るも一點を奪はる鏝ぜりの押し合ひ、小失なりと雖も肩の傷は深し。小野ベンチにて涙す。叱號の聲あり。何の涙ぞ、身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれとか。事未だ逝れるに非ず。右手を切らるれば左手にて左手をも失はば口に喰ひても傳統の寶刀むざ／＼捨つべきに非ず。然り刀を杖に起たう。されど天運遂に人力に優れり。一死後津田、小野の遊匍孰れも一壘手の足接壘せざれども神運の惡戲審判を拉し來る。あゝ吾等は遂に敗れた。夢か。夢ならば深淵の奈落に突き落せ。今年こそはと期待せし今年も駄目だった。許せ龍南一千の健兒及び祖人の靈よ。吾等には五高魂が、失はんとして失ひ得ぬ五高魂が宿つてゐる。臥薪否臥針嘗膽來るべき年こそ柏に誓ひて奴等をして城下の誓をなさしめる。此の恨こそ吾等が無邪な童心の晴天の霹靂、頂門の一針である。此の遺恨をして來年度の良きスタートならしめやう。